

# ヨハン・ホイジンガの近代社会認識とその社会的背景に関する考察 — 社会生活における遊びや娯楽に焦点をあてて —

杉浦 恭

## **Johan Huizinga's perception of modern society with reference to social conditions in his days — with a focus on play and recreation in society —**

Takashi Sugiura

### **Abstract**

There are numerous studies on Johan Huizinga, but hitherto no study has focused on Huizinga as a critic of modern society and civilization and clarified his perception of modern society with reference to the prevalent conditions of society in his day.

This paper attempts to fill the gap. Centering on Huizinga's statements on play and recreation in society, this study explores Huizinga's ideas within the context of the state of the society in which he lived.

For the purpose of this exploration we have selected as many statements regarding play and recreation as possible from Huizinga's various works and collected data on the manifestations of play and recreation in Dutch society at the time.

Looking at these data we came to understand that modern forms of recreation, such as the movies, were in general characterized by passiveness and new sports such as bicycle races and soccer had lost the original elements of play. Furthermore, we learned that Huizinga's criticisms were widely shared by contemporaries such as educators in the Netherlands.

In conclusion, Huizinga's critical attitude towards modern forms of play and recreation can be said to be a reflection of Dutch society in his time.

### 1. はじめに

レジャー・レクリエーション研究を行ううえで、必読書の一つに挙げられるのが、オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ（Johan Huizinga 1872-1945）の著した『ホモ・ルーデンス』（原題 *Homo Ludens*）である。この書は、遊戯文化の研究書と

して名高いが、ホイジンガが遊びを研究したのは、歴史研究に加えて、何らかの社会的な状況が関与していたと考えられないだろうか。事実、ホイジンガは、近代社会・近代文明に対する論評のなかで、社会生活における遊びや娯楽について多々言及している。ホイジンガが遊びについて真剣に考

えるようになったのは、近代社会全般を視野に入れながらも、実は、彼自身が生きたオランダ社会が背景にあったのではないのか。そうだとすると、遊びや娯楽に関わるホイジンガの認識について、当時のオランダ社会との関連で捉える必要性が生じる。

周知のように、ホイジンガは、歴史家あるいは遊戯文化の研究家として知られている。そのため、歴史家や遊戯文化研究家としてのホイジンガに関する第三者による研究は数多くみられる。しかしながら、ホイジンガを近代社会・近代文明批評家としてとらえ、時代・社会背景との関わりから、ホイジンガの認識を考察したものはない。もちろんホイジンガの近代社会認識や近代文明批評に対しては、いくつかの評論が存在する（坂井 1970, 栗原 1972 など）。だが、それらは、ホイジンガのファシズム批判と近代文明批評の接点に関する考察であったり（Kaegi 1947, 小松原 1954, 堀米 1975）、歴史家から近代文明批評家へと移行したホイジンガに対するコメントであったり（Vollgraff 1945, Wesseling 1996）、あるいは、ホイジンガの近代文明批評に関する分析（Blok 1936, Hanssen 1996）である。つまり、ホイジンガの近代社会認識の背景について取り組んだ研究はなく、まして、社会生活における遊びや娯楽に関する認識の背景を明らかにしたものはない。

そこで本稿は、ホイジンガの近代社会認識とその社会的背景について、社会生活における遊びや娯楽に関する言及に焦点をあてて、ホイジンガの生きたオランダ社会との関わりから明らかにすることにした。

これは、ホイジンガが、社会生活における遊びや娯楽の重要性をどのように認識していたか、さらには、本来あるべき遊びや娯楽の姿をどのように考えていたかを探求する上で意義のあることと考えられる。

本課題を達成するため、以下の手順を踏んだ。まず、ホイジンガの著作から、彼の近代社会認識のなかでも社会生活における遊びや娯楽に関する記述を抽出した。次に、その根拠になったと考えられる事柄を、当時のオランダ社会から探しだし、資料やデータを提示した。その上で、ホイジンガの認識の社会的背景について、考察を行った。

## 2. 娯楽・スポーツに関するホイジンガの認識

### (1) 映画に関する認識

娯楽に関するホイジンガの認識のうち、まず、20世紀前半に普及した映画を取り上げる。映画について、ホイジンガは次のように述べている。

新聞が文学を滅ぼすように、映画は芸術と文学の双方を滅ぼしてしまう。…（中略）…文化を構成する要素の一つとして、もはや映画の存在は無視できないかもしれない。人々は、映画のおかげで物事を知り、経験することができると思うようになる。映写機によって上映される映画が、人間に多くのものを学ばせているという錯覚が起きる。映画を製作する工程を見ることによっても、非常に多くのことを学べると、誰もが考えるようになった。映画に知的な価値があるとでもいいのだろうか。

映画は、非常に民主的な文化の構成要素である。それは、新聞以上に広い範囲にわたって、人々の感情や関心の同一化をつくり出すからである。…（中略）…新聞の場合は書かれている内容が幅広く、連載小説の欄には世界の高尚な文学が掲載されることもある。しかし映画は、どうしても内容が単調で、レベルは低いままである。製作において、様々な工夫や想像力をはたらかせ、莫大な資金を投入しているにも拘わらずである。映画は、その手法ゆえに、きわめてレベルが低くなるを得ず、ありきたりの方法で再生産される。映画は、観る人に、最大公約数的な美の尺度をもって、大衆ウケするロマンチックさを提供する。そのため、映画がつくり出す表現と想像の基準は、必然的に限定され、貧しいものになってしまう。その上、利益の追求ばかりに心を奪われている。映画は、人気を取るために、低俗な嗜好を押し進める。それは、卑俗なロマンス、どたばた喜劇となって現れる。映画は、このような低俗な嗜好を機械的にばらまくから、ついには、その嗜好が市民権を得て、社会全体のなかで重みのある文化的規範にまで高められてしまうのである。人々が映画を日々の心の糧として受け入れるならば、既に現代人が陥っている機械への隷

属状態を承認することになる。(Huizinga 1918, pp. 331-332)

さらにホイジンガは、次のように述べている。

映画について、幾つか言及しておきたい。映画は、社会に害毒を流すと批判されている。墮落した趣味をつくる、快樂への欲望をつくる、本能を刺激して不健全な行為に及ばせる。これらが、犯罪を助長するという具合にである。

こうした批判に対して、反論できるという人がある。映画は、昔から社会に受け入れられてきた道徳や規範を、芸術面で保っているのだと。…(中略)…

映画は、最後まで美徳の中に生きることを強制しない。しかし、同情心をもってやれと、観る側に問いかけるのである。不正さを曖昧にするためコミカルな表現を使う。愛のために、やむを得ず不正をはたらき、犠牲となるセンチメンタルな要素を盛り込む。映画は、不正と公正を心情によって中和する。登場人物への同情心を煽り、最後には、なにかしらのパッピーエンドがまっている。ロマン主義の最終章に、よく似ている。映画では、哲学、倫理、法律などの、いかなる規範も入り込めない、大衆の感情が善悪の基準となっているのである。(Huizinga 1935, pp. 125-126)

これらの記述から、映画に対するホイジンガの様々な認識が読みとれる。

1918年から1935年までの間、映画に対するホイジンガの認識は一貫して批判的であり、嫌悪感さえ抱いている。

人々が、映画によって様々な知識を得るようになれば、文学と芸術は衰退すると予測している。文学は映像と音声で知ろうとし、絵画は美術館で本物を観なくても、映像で見えるようになるからである。これは便利なようだが、文学や芸術がもつ本来の高みを享受することにはならない。文学や芸術を映画で学ぼうとすれば、見る側が受け身の態度で臨む以上、自分のペースで考えたり堪能することはないからである。

また映画は、興行性から、大衆ウケする作品をつくる。しかも、大衆が簡単に理解できる内容となれば、自ずとレベルは下がる。利益を上げるた

めには、たとえ低俗であっても、多くの人に見られるストーリーと映像を採用する。そのため映画を見た人間は、暗示にかけられたように、一様の感情や心理をもって映画館を出る。一度に何百人もの人間が、機械的にこのような作用を受ける。これが日々繰り返されることによって、人々の感情や関心、価値観の同一化が起こる。このような認識が、ホイジンガにあったと考えられる。

そしてホイジンガは、映画が普遍的な正義や真理を危うくし、時に不正や犯罪までも正当化することを問題視していた。映画を観る人は、登場人物に感情移入し、その時の心情が善悪の基準となる。これは、果たして映画のなかだけで済むことだろうか。ホイジンガは、映画の影響で、人々の倫理や道徳が曖昧になることを危惧していた。

このように、映画に対して批判的認識を表明したホイジンガだが、二つの記述を注意深く読むと、1918年と1935年で観点に違いがみられる。1918年の記述は文化や個性の擁護といった観点から映画を批判したが、1935年は人間の道徳や規範の尊守といった観点から批判した。これは、その時のホイジンガの興味・関心、研究テーマと関係している。前者の時期は、歴史や文化を研究の中心テーマに置いていたのに対し、後者の時期は、普遍的な真理や規範の追求がホイジンガの関心事になっていた。つまり、ホイジンガにとって映画は、いずれの時期においても捨て置くことはできなかったのである。

## (2) 娯楽全般に関する認識

娯楽全般について、ホイジンガはどのような認識をもっていたのか。

次の記述から、ホイジンガは、映画だけでなく、新聞やラジオについても批判的な認識をもっていたことがわかる。

朝食を取る机の上には新聞がおいてあり、ラジオはいつでも手の届くところにある。しかし、これらは人間にとって大切なことは何かという本質について、何も教えてくれない。日々、労働に捕らわれ、仕事が終われば飲酒やギャンブル、映画館へ行く。これが、ごく普通の人の娯楽の様である。(Huizinga 1935, p. 59)

人々は、気づかぬうちに、マスメディアによる情報に浸食され、受け身的な労働から解放された後は、飲酒やギャンブルといった低俗な娯楽を日々繰り返しているとホイジンガは捉えていた。

また、娯楽に対する人々の態度や取り組みについて、次のように述べている。

その昔、共同体が小さな形をとっていた頃、そこに住む人々は、自分たちで娯楽を創り出し、楽しんでいた。歌い、踊り、遊び、スポーツを競い合っていた。ところが今日、娯楽は、みな同じ様相を示し始めた。歌い、踊り、遊ぶ姿を見ることに、娯楽が代わったのである。もちろん昔も、プレイヤーと観衆という構図はあった。だが、今日の様相は、受動的な娯楽が、能動的な娯楽より、かなりの割合で大きくなっている。近代文化の重要な一つであるスポーツも、見て楽しむ人が増えている。物事に自分は参加せず、観衆に留まる傾向が今の大衆に見て取れる。人々が演劇から映画へ移っていくことは、鑑賞から傍観への移行である。(Huizinga 1935, pp. 60-61)

ホイジンガは、人々の娯楽について、昔と今では違いがあると見ていた。19世紀以前は、娯楽を自ら創り出したり、娯楽に対して積極的・能動的な関わり方をしてきた。ところが20世紀になると、他人が行っている姿を見るという消極的・受動的なスタイルに娯楽が変わってきた。スポーツをはじめ、娯楽の多くに見るといふ行為の一律化が起きているというのである。ただ、同じ見る行為でも、これまで娯楽として楽しまれてきた演劇は、見る側に理解・熟考・精神の葛藤といった要素が存在するが、映画にはそれがなく、人々はただ見ているだけに過ぎないとホイジンガは捉えた。

### (3) スポーツに関する認識

スポーツを近代文化の重要な一つと認識していたホイジンガは、スポーツについて次のように述べた。

スポーツが組織化され、厳しいトレーニングが日々行われている今日、もはやスポーツにおいて、遊びの要素は失われてしまった。このことは、プロとアマチュアの分離におい

て明らかになった。プロの競技者は高い運動能力を持ちながらも、その地位は真にスポーツを楽しむ遊んでいるアマチュア競技者よりも低いといわざるを得ない。職業選手には、気楽さや自然な感覚が欠け、もはや真の遊びの精神は存在しない。現代社会においてスポーツは、純粋な遊びから遠ざかっている。

(Huizinga 1938, p. 290)

ホイジンガは、スポーツの組織化が進み、毎日厳しいトレーニングを行っている職業選手に、スポーツにおける遊戯性の喪失をみた。そして、職業選手をアマチュア選手の下に位置づけた。それは、職業選手に気楽さや遊び感覚が欠けているからである。スポーツを文化として捉えるならば、「真の文化は何らかの遊びの要素をもたずに存続することはできない」(Huizinga 1938, p. 312)というホイジンガの信念が根底にあったのである。

また、ホイジンガは、現代のスポーツが勝敗にこだわりすぎて精神性を失っていること、職業選手や熱狂的なサポーターが生活のすべてをスポーツにつき込んでしまう状況を幼稚症の現れと言った。(Huizinga 1935, p. 164)

スポーツは、本来、結果よりもプロセス、つまりトレーニングやプレイしていることに意義があり、遊びの精神こそスポーツの醍醐味であるのに、現代は、選手も見る側も勝敗や結果にこだわり、日常生活全般にまでスポーツが大きな影響を及ぼしていることを、ホイジンガは批判したといえる。

### 3. 娯楽・スポーツに関するオランダの状況

社会生活における遊びや娯楽に関するホイジンガの認識の背景を探るべく、これより、ホイジンガが生きたオランダ社会の状況について明らかにする。

#### (1) 映画

オランダで初めて映画が上映されたのは1896年である。オランダ北部に位置するフリースラント州の都市レイワールデンで、7月12日から一週間設営された遊園地内の簡易映画館だった。常設型の映画館は、それから10年ほど過ぎた1907年、アムステルダムに建てられた。(Leeuw 1995, p. 218)

常設映画館がつくられると、映画を見る人の数は瞬間に増えた。当時の映画は無声映画で、映像の質も悪かったが、一度に多くの人が楽しめるエンターテインメントとして人気を呼んだ。

そして1920年代の後半になると、映画は広く普及し、20年代の終わりには、大衆娯楽として定着した。

では、当時どのくらいの人が、映画を見たのだろうか。

映画の普及は1920年代だが、オランダ中央統計局（Centraal Bureau voor de Statistiek, 以下CBSと略す）が、映画館の全入場者数を調査したのは1939年以降である。そのため、これ以前の入場者数については、断片的な報告書に限られる。ここでは1924年と1936年にまとめられた報告書、そして中央統計局による1939年から1943年の調査を資料として用いた。

1919年から1924年にかけては、毎年、延べ550万人が映画を見ていた。そのうち450万席分は、一回75セントという安さで映画のチケットが売られた。この安さが映画の大衆化につながった。（De Telegraaf 1924, p. 5）

1936年の報告書は、労働者教育研究所（Instituut voor Arbeidersontwikkeling）が、1933年から1934年にかけて、オランダ全土の621人の労働者を対象にした余暇活動調査の結果である。これはオランダ全土の映画館入場者数を示したものでないため、延べ人数はわからない。しかし労働者のうち、どのくらいの割合が一年に映画を見ていたかは把握できる。

報告書によれば、621人の労働者の中で映画館に行った者は206人であった。（Blonk 1936, p. 94）つまり、1934年の時点で、33.2%の労働者が映画を見ていた。ただ、これは男性労働者に限った調査であるため、オランダ全体についていうことはできない。男性労働者においては、三人に一人が映画を見ていたことになる。映画は、1920年代後半から10年も経たないうちに、かなり労働者に普及していたことがわかる。

1939年から1943年にかけては、1939年の延べ映画館入場者数が約4千万人、1940年は約3千4百万人、1941年は約3千1百万人、1942年は約4千3百万人、1943年は約5千5百万人であ

った（CBS 1959, p. 38）。この4年間でいえば、毎年3千万人から5千万人ほどが、映画館に足を運んでいた。1920年前後の入場者数が延べ550万人であったことから、20年間のうちに入場者数は6倍から10倍に増えた。

さて、映画の普及について、当時のオランダでは、どのように見られていたのだろうか。ここでは、1910年代前半にどのような議論があったのか、当時の資料から明らかにする。

資料として用いるのは、オランダの教員組織が、アムステルダムにある18の映画館で行った調査結果と、163の学校で行ったアンケート調査の結果である。調査結果は、調査委員会代表のStocvisが、報告書『アムステルダムの学童と映画館』にまとめた。

まず報告書は、学校での調査から、子どもの映画館入場経験について記している。29,647人の子どものうち、映画館に入ったことがあるのは20,164人で、これは全体の68%に当たる。映画館入場経験者のうち、一週間に一回以上の頻度で毎週映画館に行ったのは2,136人いた。また、映画館に入った経験がある20,164人中、12,139人は夜に入ったことがあり、そのうち2,767人は夜だけ映画館に行っていた。子ども全体で見れば、夜に映画館に入った経験があるものは41%、夜だけ映画館に行く子どもは9%いた。

労働者階級が多い地域の映画館では、火、水、木、土曜日の午後は、5歳から12歳の子どもで館内が満席だった。映画館は、子どもたちを安い値段（6セント）で預かる託児所のようなもので、小学校の授業後、暴力、泥棒、脅迫、殺人などの教育を提供していると、報告書に記されている。（Stocvis 1913, pp. 9-10）

上映された映画の内容はどうだったのか。18の映画館で調査された結果が、表1である。

映画館によって、評価に多少の違いはあるが、ほとんどの映画館で上映されている映画は、委員会から良い評価を受けていない。18の映画館の平均を算出すると、約53%が「非常に有害」であった。一方、「教育的価値が認められる」のは、全体平均で約14%だった。特に、C、F、Q、Rの映画館で上映された映画については、「非常に有害」が65%以上あった。<sup>註1)</sup>

表1 映画の内容に関する評価

(単位: %)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R
非常に有害	40	30	65	40	40	65	45	35	50	55	50	40	60	45	55	50	70	70
やや害あり	30	25	0	30	20	0	20	25	20	15	20	10	20	5	25	30	5	0
害がない	15	25	15	0	20	30	15	30	25	20	15	40	10	20	10	10	15	15
教育的価値が認められる	15	20	20	30	20	5	10	10	5	10	10	10	10	30	10	10	10	15

(Stokvis 1913, pp. 24-45より作成)

注: アムステルダムにある映画館 (A から R) で上映された映画の内容について、委員会が四つの尺度で評価した結果を示したものの。

報告書は、映画のなかでも、特にコメディのものに問題があるとして、次のように述べている。

映画は、軽犯罪をコミカルに描写するため、これらに対する罪悪感をなくしてしまう。映画は、使い方によっては教育に有益だが、利益を優先する限り、非道徳的なものが多くなる。映画が登場するまでは、指人形や操り人形が子どもたちの人気を得ていた。そこで演じられる内容は、コメディであれ健全であった。たとえ軽犯罪や悪戯を演出したものであっても、それは人形が演じており、スクリーンのなかで人間が行うのとは違った。映画の登場によって、指人形や操り人形が廃れてしまった。(Stokvis 1913, pp. 23-24)

最後に報告書は、次のような見解を述べ、映画に批判的な評価を下した。

映画は、内容の展開が速すぎ、殴る、けるなどの暴力が多い。これはコメディでも同じである。このような映画を人々が面白く笑うのはよくない。映画の中で、人間の動作が小間切れに速く動く様子は、近代において「なんでも速く」という悪い価値観をそのまま映している。見ている側は、熟考する間がない。このような映画は、知識の発展に貢献しない。自然の映像を見せる以外、現時点で、映画が教育的価値をもつか疑問である。

映画は、美術、芸術の範疇にない。レコードが音楽本来の価値を表現しきれないように、映画は劇場を表現することはできない。ドラマチックな

作品でさえ、映画はそれを表現できない。文学を映画で表現すると、どうしても文学本来の価値が損なわれてしまう。

映画は子どもの美的素養を抹殺するばかりでなく、映画館は泥棒養成所になっている。児童保護プログラムの委員によれば、泥棒をした子どもの多くが映画の影響を受けていた。万引きは、映画の中ではスリルとコミカルに描写されていて、それほど悪いイメージを受けない。それを鵜呑みにした子どもが万引きに走るケースが多々あった。現金を盗んだ子どもは、貧しいというより、映画が見たいために盗んだ者が多い。犯罪のテクニックが映画館で教えられている。

映画は人間を悪くし、その悪い人間が映画を作るから、よい映画ができるはずがない。映画製作者は、金儲けのため、大衆の興味を引くものしか作らない。なかには、よい映画も幾つかあるが、そのような映画には、客が集まらない。やはり大衆は、どうしても興味本位の面白い映画を好む。また、映画は人々を洗脳する機能をもっている。愛する人のために盗みを正当化してみせたり、上手な泥棒が英雄視される。正義や美に対する感覚を鈍らせ、創造力を減退させるのが映画である。(Stokvis 1913, pp. 46-48, 54-57)

このように映画は、庶民の新しい娯楽として普及した一方、教育関係者は、調査結果からその悪影響について指摘した。物事の分別が付き、自分

の行動に責任のもてる大人が映画を見ることは由としても、身体的・精神的に成長段階にある子どもが映画を見ることについて、当時の教育者は批判的だった。

こうした当時の状況を垣間見ることができる生の証言を得ることができた。以下に記すインタビューは、1930年代のアムステルダムの映画館の様子である。

### Gerarda Naber 氏へのインタビュー<sup>註2)</sup>

筆者：今まで色々なお話を聞かせていただきましたが、次に、映画に関する質問についてお答えいただけますか。

Naber 氏：いいですよ。でも、いつのことかしら？

筆者：まず、あなたが初めて映画を見たときのことについて教えて下さい。

Naber 氏：よく覚えていないけど、小学校を卒業したあとだったと思うわ。

筆者：ということは、1933年ごろですか？

Naber 氏：そうだと思うわ。というのは、私が通っていた小学校では、子供が映画館に行かないよう先生にいわれてたから。……（途中省略）……

筆者：初めて映画を見たときは、どんな印象を受けましたか？

Naber 氏：うわさには聞いていたけど、やっぱりびっくりしたわ。私の住んでいた町には映画館がなかったから、アムステルダムまで行ったの。科学の進歩ってすごいなと思ったわ。映画を観た後は、友達みんなが興奮していたわ。なんだか頭がポーとして、主人公のように何でもできる気分になったわ。

筆者：どんな映画でしたか？

Naber 氏：よく覚えていないけど、ロマンスとコメディの映画だったと思うわ。内容は忘れたけど、男性が思いを寄せる女性のために、ちょっとぐらい悪いことでもユーモアを効かせて気を引こうとしていたわ。それが結構かっこよかったの。

筆者：映画について覚えていることを、なんでもよいから教えて下さい。

Naber 氏：そうね、私の町（Wormerveer）に映画館ができたのは1936年だったわ。入場料金は50セントよ。映画館は、土曜日と日曜日だけ開いていたわ。二、三ヶ月の間、同じ映画をやっていたわ。

筆者：他には？

Naber 氏：アムステルダムの映画館では、上映の前に余興をやっていたわ。手品やダンス、その他に面白いパフォーマンスをみせてくれたので、多くの人が見に来ていたのよ。田舎とは違って楽しかったわ。アムステルダムの映画館は、私の住んでいた町の映画館と違って幾つもあるし、面白いの。

筆者：ということは、自分の町の映画館より、アムステルダムによく行ったのですか？

Naber 氏：だって、田舎の映画はつまらないのよ。アムステルダムの方が、興奮する映画があるし、ロマンチックなものがあるの。

このインタビューからも分かるように、当時は、子供達が映画館に行かないよう学校が指導していた。また、映画を見た後は、興奮して、ややもすると善悪の判断が曖昧になる恐れがあったことも推察できる。

### (2) 娯楽全般

娯楽全般についてはどうだったのか。この時代の余暇活動や娯楽に関する資料がほとんどない中で、オランダのメディア De Telegraaf と労働者教育研究所が行った調査がある。

De Telegraaf は、一日8時間労働が法律で決められた1919年以後、5年間に渡ってアムステルダムに住む労働者の自由時間の使い方を調べた。

その結果、1920年の調査では、労働者の多くが自由時間を飲酒に使っていた。土曜の午後、仕事が終わると、労働者は真っ直ぐバーへ行き、酒を飲むのが一般的だった。平日は自由時間がそれ

ほどなかったので、バーで酒に浸ることは少なかったが、土曜の午後になるとバーは常に労働者でいっぱいになった。そこで彼らは、カードゲーム等のギャンブルを楽しんだ。(De Telegraaf 1924, p. 5)

De Telegraaf の報告書には、図書館の利用や音楽活動、演劇鑑賞、さらに教養教育について、次のように書かれている。

市立図書館は、8 時間労働が決められた 1919 年以降も利用者数は増えなかった。音楽活動は、音楽に興味のある者が集まって、アマチュアの合唱団や合奏団を結成した。その一方で、演劇を見に行く人の数は、1921 年以降減った。これは労働者階級だけでなく、中・上層階級についてもいえる。その理由は、映画が人々の娯楽として高い人気を得たからである。

労働者の知的発展や教養教育については、様々な組織が努力を試みたが、結局、労働者は提供されるプログラムにほとんど興味を示さなかった。公共利益協会は、労働者の知的発展のため、自由時間を有効に利用するように労働者に促したが成功しなかった。成人教育としての国民大学も不発に終わった。1920 年から 1923 年の間に、国民大学の受講生は毎年減った。しかも受講生に占める労働者の割合は、1921 年が 26.1 %、1922 年が 25.5 %、1923 年が 14.7 % であった。(De Telegraaf 1924, p. 6)

次に、1933 年から 1934 年にかけて、労働者教育研究所が、全国 621 人の労働者を対象に調査した結果から、当時の状況を把握する。

表 2 は、労働者の自由時間の過ごし方について、項目ごとに一週間の平均を示している。

自由時間の過ごし方として多いのは、「サークル・クラブ活動」と「親戚・隣人の訪問」で、どちらも 6 時間を超えている。これは自由時間が増えた中で、労働者のサークル・クラブ活動が活発化したことの現れである。親戚や隣人宅への訪問は、昔からオランダ人の間でよく行われていた余暇活動である。自由時間の過ごし方としては、ごく一般的であった。

続いて多いのが、「家族と過ごす」、「ラジオを聴く」、「博物館・教養講座」であった。ラジオは、この時代に普及した画期的なメディアであった。今日、多くの人がテレビに自由時間を費やすように、当時はラジオが主たる娯楽であった。意外なのは、博物館に行ったり、教養講座に参加している時間が比較的長いことである。De Telegraaf の調査では、労働者の多くが自由時間を飲酒や映画に費やし、教養教育に興味を示さなかったが、1930 年代になると変化が現れた。

「観劇・音楽鑑賞・映画」は、1 時間 19 分である。映画は人気のある娯楽だが、毎週、映画館へ行くわけではないので 1 時間台となっている。また 1 時間未満であるが、「スポーツ観戦」も娯楽として定着し、サッカーや自転車レースなどの観戦者が増えた。教会へ行ったり宗教行事に参加する時間

表 2 一週間の自由時間の過ごし方

過ごし方	時間	過ごし方	時間
家族と過ごす	4 時間 43 分	スポーツ観戦	0 時間 23 分
趣味 (工作・収集・動植物など)	1 時間 50 分	散歩	1 時間 29 分
ラジオを聴く	3 時間 14 分	日帰り行楽・サイクリング	1 時間 31 分
博物館・教養講座	2 時間 3 分	親戚・隣人の訪問	6 時間 25 分
観劇・音楽鑑賞・映画	1 時間 19 分	サークル・クラブ活動	6 時間 48 分
ダンス・舞踏会	0 時間 6 分	教会・宗教行事	0 時間 14 分

(Blonk 1936, p. 32より作成)

注：自由時間は実質的な自由時間で、総自由時間から食事・睡眠などの生活必要時間を除いた時間。データは一週間ごとの平均値。

表3 大衆娯楽への参加

入 場 者 数						
						(単位：×1,000人)
年	映 画	ス ポー ツ 観 戦	演 劇	コ ン サ ー ト	そ の 他	全 体
1939	40431	4899			13691	59020
1940	33912	4174			10120	48206
1941	31302	5381	2731	1253	6274	46941
1942	42936	7380	3289	1276	7597	62477
1943	55387	8100	3332	1816	8797	77432
出 費 総 額						
						(単位：×1,000ギルダー)
年	映 画	ス ポー ツ 観 戦	演 劇	コ ン サ ー ト	そ の 他	全 体
1939	19164	2114			7618	28896
1940	16183	1516			5842	23541
1941	16984	2052	2395	987	3716	26133
1942	25952	3382	3446	1159	5981	39919
1943	36406	4772	4664	2148	9113	57103
国 民 の 参 加 率						
						(単位：%)
年	映 画	ス ポー ツ 観 戦	演 劇	コ ン サ ー ト	そ の 他	全 体
1939	5.9	0.7			1.9	8.6
1940	4.9	0.6			1.4	6.9
1941	4.4	0.8	0.4	0.2	0.9	6.7
1942	5.5	0.9	0.4	0.2	1.0	8.0
1943	7.2	1.1	0.4	0.2	1.1	10.1

(Centraal Bureau voor de Statistiek 1959, p.38より作成)

注：入場者数は、自治体が発券した入場券の数に基づく。

は僅かであり、日曜日でさえ、教会へ足を運ぶ人が少なくなったことを示している。人々の教会離れ、宗教離れが進んだことが分かる。

1939年から1943年にかけての大衆娯楽については、表3が示している。

「映画」の入場者数は、第二次大戦初期に減少したが、その後増えて、1943年には年間5500万人が映画を観た。「スポーツ観戦」も同じ傾向がみられたが、入場者数は「映画」より少なかった。ただ、1939年から1943年の伸びを考えれば成長率は大きい。「演劇」と「コンサート」の入場者数は増えているものの、「映画」や「スポーツ観戦」の入場者数には及ばない。「その他」が減っていることから考えれば、大戦中の大衆娯楽は、この四つが主であった。

「映画」の入場者数は、けた違いに多く、いずれの年でも全体の7割を占めていた。大戦中、映画がいかに大衆娯楽として大きな位置を占めていたかが分かる。

次に、それぞれの娯楽について、人々が出費した総額をみると、4年間の出費の変化は、各娯楽とも、おおよそ入場者数の推移と同じ傾向にある。ここでも映画は最も多く、全体の6割から7割を占めている。1943年には、およそ3600万ギルダーが、映画の入場料として使われた。一回の料金が安いことから考えれば、いかに映画が普及していたかが分かる。注目は、「スポーツ観戦」と「演劇」の出費総額である。入場者数では「スポーツ観戦」が「演劇」の二倍以上いるのに、出費総額はそれほど違わないか、むしろ「演劇」の方が多い年さえある。これは、演劇鑑賞の費用がスポーツ観戦に比べて高額だったことを意味している。単純に計算すると、演劇鑑賞はスポーツ観戦のおよそ2倍の入場料がかかったことになる。このことから、演劇鑑賞よりもスポーツ観戦の方が、大衆娯楽として人気があったと推察できる。

国民の参加率を見ると、全体では入場者数や出費総額と同じように、1939年から1941年にかけて

て低下したが、その後は上がった。ただ全体の参加率は、いずれの年も 10% 以下であり、国民の 10 人に 1 人以下しか参加していなかった。大戦中であることと、新生児から高齢者までを含んだ参加率だからである。しかし、その中でも「映画」は国民の 5% 程度、つまり 20 人に 1 人が観ていた。「スポーツ観戦」は 1% 弱であり、100 人に 1 人という計算になる。「演劇」や「コンサート」はさらに少なく、250 人から 500 人に 1 人程度であった。文化的な余暇活動を行う人の割合が低かったことが分かる。これらから、戦時中の娯楽として人々に普及していたのは、主に映画であったといえる。

### (3) スポーツ

オランダでは、20 世紀前半にスポーツが普及した。特に、1920 年代に入ってから第二次世界大戦にかけて、スポーツ人口の増加が著しかった。1900 年のスポーツ人口は 2 万 3 千人であったが、1920 年には 9 万 8 千人、1943 年には 41 万 3 千人になった。種目の中では、サッカーが最も多く、体操がこれに続いた。両者は、1910 年代まで同じ様な伸びを示したが、1920 年代になってからはサッカーが圧倒的に増えた。1943 年には、全スポーツ人口の 36% をサッカーが占めた。(CBS 1959, p. 39)

スポーツが自由時間のなかで楽しみとして行われるようになった一方、スポーツはアマチュアからプロへ、勝利至上主義へと傾いていった。

その代表的な例が、趣味としてのサイクリングから自転車競技への移行であった。自転車がオランダで普及して以来、サイクリングは人気のある余暇活動だったが、次第に世の中の関心は、自転車競技に移っていった。

Leeuw は、20 世紀前半の状況を次のように記している。

人々は、はじめ個人レベルで自転車のスピードを競っていたが、「民衆オランダサイクリスト連盟 (Algemeen Nederlandsch Wielrijders-Bond)」が、ある時、アマチュアスポーツとして自転車競技を開催すると、レースは大変な熱狂を帯びた。これを成功とみた連盟は、しばしば競技会を開いた。すると競技会に多くの観戦者が集まり、自転車レ

ースを観ることが人々の娯楽となった。その後、自転車レースはプロフェッショナル化して、新たな競技スポーツとなった。しかしこのことは、連盟が当初目的としていた楽しみとしてのサイクリング普及の精神から離れていった。人々の関心は、もはやレースにあった。そして自転車競技は、選手の日常生活を支配した。若者の中には、生活の全てを自転車にかける者もいた。プロ競技者として生きていくため、それまでの仕事を辞め、所持金の全てを自転車につぎ込み、朝から晩までトレーニングをする者が増えた。レースで優勝すれば、多額の報償が得られたからである。また、自転車レースが開催されるときには、表向き規制されていたギャンブルが街中で行われた。すると、それまでスポーツを積極的に楽しんでいた多くの者が、自転車レースのギャンブル観戦者となった。(Leeuw 1995, pp. 91-95)

こうした傾向は、自転車競技に限ったことではなかった。それを知ることができる当時の様子を、インタビューによって得ることができた。

### Gerarda Naber 氏へのインタビュー

筆者：では次に、スポーツについて教えてください。

Naber 氏：いいけど、私は女性だからほとんどスポーツはしなかったわ。

筆者：あなたが 10 代の頃、オランダでは、どのようなスポーツが人気でしたか。

Naber 氏：そうね、サッカーとか自転車とかヨット、体操かな。もちろん、スケートも人気があったわ。結構、みんながスポーツを楽しんでいたわ。オランダでは 1928 年にオリンピックがあったから、それでスポーツが人気になったんじゃないかしら。

筆者：あなたもオリンピックを見に行きましたか。

Naber 氏：いいえ、私は小さかったから記憶にないわ。でもすごかったらしいわよ。競技場だけでなく、アムステルダムが人でいっぱいだったらしいわ。

筆者：あなたは若いときにスポーツの試合を

見に行くことはなかったのですか。

Naber 氏：私はほとんど行かなかったけど、男の人たちはサッカーの試合を見に行ったり、ヨットやスケートのレースに行っていたわ。女性が競技場に行くことを私の両親は嫌っていたの。

筆 者：それは、どうしてですか。

Naber 氏：あまり雰囲気が良くなかったから。喧嘩があったり、若い女性が男性に声をかけられたり、賭け事も行われるような場所だったから。男性は、どうしてあんなに熱狂的になるのかしらね。たかがスポーツなのに。

筆 者：若い男性で、サッカーやヨットなどに夢中になっていた人は、近くにいませんか？

Naber 氏：私の親戚にサッカーをしていた人がいたけど、結構、うまかったのよ。チームでプレイしていたけれど、プロにはなれなかったわ。

筆 者：もう少し、詳しく話してくれますか？

Naber 氏：確か、有名になろうと一日中サッカーをしていたわ。だって一流の選手になれば、すごいお金が手に入るから。彼は、それを夢みていたのね。仕事もろくにせず頑張っていたけど、結局ダメだったわ。

筆 者：スポーツについて、ほかに何か印象的なことはありましたか？

Naber 氏：私の主人は労働組合の委員長をしていたけれど、応援しているチームを支援していたわ。周りの人たちは、試合にお金を賭けていたみたい。勝って儲かるときはいいけど、大きな損をすることもあったわ。男って、しょうがないわね。

このように、スポーツに対する人々の熱狂ぶりが、プレイヤーを、楽しみとしてのスポーツから、記録や順位、報酬といったプロフェッショナルな競技スポーツへ転向させた。観戦者の増加は、競技スポーツの人気を高め、それまでアマチュア競技者として活動していた者が、プロ化した選手へ

と変わっていったのである。また、スポーツ観戦者は、スポーツをしばしばギャンブルに利用していたことが分かった。

#### 4. 考察

まず、映画に関して、ホイジンガの認識は、当時のオランダの社会状況が背景にあったと考えられる。

映画は、1920年代後半になると、人々の娯楽として定着した。そうしたなか、ホイジンガのいうように、映画は様々な問題を抱えていた。Stocvisの報告書からわかるように、映画は、教育関係者から多くの問題を指摘されていた。また、ホイジンガが考えていたように、映画は、芸術の範疇になく、文学本来の価値を表現することが不可能なばかりか、文学の価値を損ねてしまうと評価されていた。

映画は、興行性から、大衆ウケする作品が多かった。なかには教育的価値のある映画も上映されたが、それらには、ほとんど観客が集まらなかった。そのため、制作者側は、大衆の興味を引くストーリーや映像を作った。こうして映画のレベルは自ずと下がり、人々の創造力を減退させたと批判された。そればかりか、映画は人々を洗脳する機能さえもっていると認識されていた。このことは、Naber 氏へのインタビューからも推察できる。さらに、ホイジンガがいう映画の害毒について、報告書は、その論拠となる当時の状況を示していた。アムステルダムにおいては、半分以上の映画が有害であると評価され、教育的価値が認められた映画は全体の14%だけであった。コメディイものは、軽犯罪をコミカルに描写したため、見る側は、その程度の犯罪ならば、許されてしまうような心理状態に陥り、罪悪感が麻痺してしまう可能性があった。過去にもこのような内容についてコミカルに演じる文化は存在したが、それは指人形や操り人形の世界であり、実際に人間が行う映像を見るのとは違った。

ホイジンガは、映画が人間の倫理や道徳を危うくすると認識していたが、このことは、報告書に「映画館は泥棒養成所となっている」と書かれていることから理解できる。窃盗を働いた子どもの多くが、万引きをコミカルに描いた映画の影響を

受けていた。映画は、愛のために盗みを正当化し、上手な泥棒を英雄視した。映画は普遍的な正義や真理を危うくすると、ホイジンガの認識は、的を得ていたと考えられる。

映画による低俗な嗜好を心の糧として受け入れるなら、機械文明への隷属を承認することになるというホイジンガの認識についても、報告書からそれが読みとれる。

以上から、映画に関するホイジンガの認識は、当時のオランダ社会が背景にあったと考えられる。

人々が、映画を娯楽の第一におけば、受け身の態度をもつ人間が増え、人々の余暇活動は、益々、安易な方向に向かう。映画は、精神を均質化し、創造力を減退させ、人間の主体性を失わせる。このようにホイジンガは捉え、映画の普及に文化の危機を予期していたと思われる。

娯楽全般については、1920年の時点で、労働者の多くが自由時間を飲酒やギャンブルに使っていたことがわかった。このことから、ホイジンガのいうように、ごく普通の人々が、労働から解放された時間を飲酒やギャンブルに利用していたことが裏付けられた。自由時間の多くは、気晴らしや気分転換に利用されていたと考えられる。

そして、1920年代前半には、人々の娯楽が演劇から映画へ移り、第二次世界大戦中は、映画が娯楽の主役となった。労働者の多くは、知的発展や教養を身につけるプログラムに興味を示さず、受動的で安易な娯楽を好んだ。積極的・能動的な娯楽は少なかった。1930年代前半には、サークルやクラブ活動、博物館巡りや教養講座の参加も増えたが、静的・受動的な活動も多かった。特に、ラジオに費やす時間が多かったことは、ホイジンガの認識を裏付けるものである。また、スポーツを見て楽しむ人が増えているとのホイジンガの認識は、1936年の調査報告書にスポーツ観戦が項目として挙げられていることや、第二次大戦中にスポーツ観戦が映画に次ぐ娯楽として位置づいていたことから理解できる。

自由時間の過ごし方からわかったことは、1930年代前半には、積極的・能動的な活動がみられた一方、消極的・受け身の活動が依然として多かったことである。自己実現・自己開発といった活動、

あるいは文化的な活動は少なかった。ただ、労働者は、それぞれの好みやライフスタイルにあった、多様化した自由時間の過ごし方を行うようになった。

人々の娯楽が消極的・受動的だとするホイジンガの見解が、当時のオランダ社会において、全て事実とはいえないまでも、労働者の傾向としては、それが資料から読み取れた。

現代のスポーツについて、ホイジンガは、遊びの要素が失われ、職業選手に真の遊びの精神は存在しないと批判的な認識を示した。また、選手が生活の全てをスポーツにつき込んだり、熱狂的なサポーターがスポーツギャンブルにのめり込む姿を見て、幼稚症の現れと批判した。

当時、オランダでは、余暇活動の中でサイクリングが遊びとして行われていた一方、プロスポーツとして自転車競技が人気を得ていた。職業選手は、試合に勝って多額の報酬を得るため、生活の全てを自転車とトレーニングに費やした。そこには、もはや遊びの精神は存在しなかった。そしてこのことは、自転車競技の観戦者を増やし、見るスポーツが娯楽となっていった。観戦者の中には、純粹に競技を見ることより、ギャンブルに興味をもつ者が多くいた。

また、当時のオランダでは、サッカーでも同じような状況が存在した。プロスポーツ選手になるため、仕事もせず、日々、サッカーのトレーニングに励んだり、大きな試合には、スポーツギャンブルが行われていた。サッカー界でも、スポーツが遊びから遠ざかっていたことが窺い知れた。このことから、スポーツに対するホイジンガの批判的認識は、当時のオランダ社会に基づいていたと考えられる。

20世紀前半におけるオランダのスポーツは、ホイジンガがいう文化の基礎条件の一つである「物質的価値と精神的価値のバランス」を欠き、遊びの形式的特徴の一つである「本来の営みとは別のもの」という条件を満たしていなかった。<sup>註3)</sup> スポーツがギャンブルの対象となったり、商業主義の影響を受け、物質的価値ばかりが全面に出て、本来、大切にされなければならない精神的価値がなおざりにされていたのである。スポーツは、遊びであるがゆえ、限られた時間と空間のなかで完

結し、結果が日常生活に及ぼす影響はわずかでなければならぬ。しかしながらオランダでは、スポーツが人々の生活全般にまで経済的な影響を及ぼす状況が存在した。遊びとしてのスポーツは文化の範疇にあるが、遊びの精神を失ったスポーツは文化の範疇にないことを、ホイジンガは当時のオランダから認識したと考えられる。

## 5. おわりに

本稿は、ホイジンガの近代社会認識のうち、社会生活における遊びや娯楽に関する内容について、その社会的背景を明らかにした。その結果、ホイジンガの認識の背景には、当時のオランダ社会があったとの結論に達した。

ホイジンガは、社会生活における主体的な遊びに意義や価値を見いだしていたが、当時の娯楽は安易で、受け身の傾向が見られた。このことは、ホイジンガにとって、単なる娯楽というレベルの問題に留まらなかった。文化の創造や主体的に生きる人間の危機を認識していたと考えられるからである。物事に対して積極的に参加せず、外から見ているという態度は、労働形態の機械化が進み、受動的な労働が増えたことにも拠るが、能動的・積極的な態度を喪失した人間の増加を、ホイジンガは近代社会の由々しき問題とみていた。そしてホイジンガは、最終的に近代社会に対して批判的な見解を示した。受け身の態度をもった人間が増えたことによる、社会全体の思考の均質化と、文化の画一化・低迷化についての批判であった。

ホイジンガの生涯と研究業績を追うと、1930年頃に変化が見られる。ホイジンガは晩年になって、それまで研究してきた、中世、ルネサンスを代表とする文化の記述的研究に加えて、近代社会、近代文明に対する文化の規範的研究を行うようになった。これは、少なからずホイジンガの生きた時代・社会背景が影響していたと考えられる。オランダの産業革命が、イギリス、ベルギーより半世紀遅れた分、19世紀半ば以降、オランダは急速に近代化を押し進めた。しかしながら、ホイジンガを取りまく生活環境では、次第にその歪みが現れ、近代化のマイナス面が露呈した。本来ならば、歴史家、文化史家で居続けたかったであろうホイジンガは、社会の変化によって、近代社会・

近代文明批評家へと転向せざるを得なかったのである。それはホイジンガにとって、決して冒してならない文化や「遊び」の崇高性を、近代化が効率性や合理化の名の下に蹂躪したからである。

ホイジンガの遊び研究は、ある種、貴族主義的な見地から行われているため、ともすれば大衆娯楽に対する蔑視が見て取れるが、これも近代産業社会が人間と遊びの質を落とすとしたとホイジンガが認識したことによる。

現代社会において、映画をはじめ、様々な娯楽、スポーツが、必ずしも受け身で、質の低いものとは思わない。問題は、それらの活動と関わる人間側の態度にある。能動的・積極的、さらには創造的な態度で臨み、遊びの要素が存在すれば、映画や娯楽は、ホイジンガにとっても文化の範疇にあるといえよう。ホイジンガが文化を評価する判断基準は、そこに崇高な理想を体現する主体的な遊びがあるかどうかであった。これが、ホイジンガの遊戯文化論のユニークな点である。

## 註

- 1) 実際、アムステルダムでは、どのような内容の映画が上映されていたのか、映画のタイトルと内容を三つほど紹介しておく。

『ベベが休日に宿題をする』

ベベは、友達にカンニングのテクニックを教えたり、他人の郵便受けから手紙をうまく取ってしまう。映画のなかでは、これらがコミカルに描かれている。だが、いたずらっ子のベベが罰を受けることはない。

『ファントマス』

泥棒を英雄視した内容。子どもの興味を引くようにつくられている。

『Mariages imprévus』

妻を失ったレベルディーは、息子のマックスと二人暮らし。隣の家には、未亡人のデサスタスと娘のコラリーが住んでいる。ある時、レベルディーとマックスは、低い垣根の向こうに見える魅力的な未亡人と愛らしい娘に物欲しそうな視線を向ける。そして甘い言葉が交わされる。「あなたには娘がいるし、私には息子がいる。あなたは未亡人で、私は妻を失った。もしかしたら私たちはお互いに理解し

合えるかもしれない。」それは未亡人にとっても同じ気持ちだった。しかし、レベルディーは未亡人がふくよかすぎると感じ、マックスはコラリーの胸が小さいと不満を漏らす。そこで、二人はお互いのパートナーを交換する。

- 2) インタビューを行ったのは、1997年7月20日、Naber氏の自宅である。当時77歳の彼女は、快くインタビューに応じてくれた。世間話を交えながら3時間ほどに及ぶ質問をしたが、当時の様子を鮮明に答えた。氏は、両親と男5人女5人の計12人家族の9番目の子として1920年に生まれた。父は工場労働者、母は専業主婦であった。生まれは北ホラント州の田舎町 *Uitgeest* で、7歳の時に新興工業地 *Wormerveer* に移り住んだ。22歳で結婚するまで家族と *Wormerveer* に居住。一般的な労働者の家庭で育った彼女は、初等教育を終えた後、家事手伝いを経て、15歳から1年半の間、家政婦をした。20歳までは、不定期に家政婦のアルバイトをしながら過ごした。
- 3) ホイジンガは『明日の影のなかに』（1935）の第4章で、文化が文化として成立するための基礎条件を三つ挙げた。その第一が「物質的価値と精神的価値のバランス」であった。また、『ホモ・ルーデンス』（1938）の第1章で、遊びの形式的特徴を挙げ、「遊びは、本来の営みとは別のものであり、物質的な利害関係を伴わない」といっている。

### 引用・参考文献

- Blok, P. R, *Niet: in de schaduwen van morgen Maar: in het licht van den komenden dag*, N. V. Voorheen Batteljee & Terpstra, Leiden, 1936
- Blonk, A, *De besteding van de vrije tijd door de Nederlandse arbeiders*, Nutsuitgeverij te Amsterdam, 1936
- Centraal Bureau voor de Statistiek, *Zestig jarenstatistiek in tijdreeksen*, Uitgeversmaatschappij W. de Haan N. V. Zeist, 1959
- De Telegraaf, *De vrije tijd van den arbeider*, De Telegraaf, 1924
- Hanssen, Leon, *Huizinga en de troost van de geschiedenis*, Uitgeverij Balans, 1996
- 堀米庸三, 歴史と現在, 「『朝の影のなかに』序」, 東京, 中公叢書, 1975
- Huizinga, Johan, “Mensch en minigte in Amerika”, *Verzamelde Werken V*, Tjeenk Willink, Haarlem, 1918
- , *In de Schaduwen van Morgen*, Tjeenk Willink, Haarlem, 1935
- , *Homo Ludens*, Tjeenk Willink, Haarlem, 1938
- , “Conditions for a recovery of civilization”, *Verzamelde Werken VII*, Tjeenk Willink, Haarlem, 1940
- , *Geschonden wereld*, Tjeenk Willink, Haarlem, 1943
- , ホイジンガ選集 (邦訳書), 東京, 河出書房新社, 1971
- Kaegi, Werner, *Das historische Werk Johan Huizingas*, Universitairepers Leiden, 1947
- 小松原健太郎, 文化史家ヨハン・ホイジンガの生涯と思想, 西洋史学第2号, 1954
- 栗原福也, ホイジンガ, その生涯と思想, 東京, 潮新書, 1972
- Leeuw, K. P. C, *Van ontspanning en inspanning*, Tilburg, Den Haag, 1995
- 坂井直芳, ホイジンガ, わが歴史への道 (訳書), 東京, 筑摩書房, 1970
- Stokvis, Simon, *Het Amsterdamsche schoolkind en de bioscoop*, Amsterdam Uitgevers-Maatschappij, 1913
- Vollgraff, C.W, *Herdening van Johan Huizinga*, Tjeenk Willink, Haarlem, 1945
- Wesseling, H. L, *Zoekt Prof. Huizinga eigenlijk niet zichzelf?*, Uitgeverij Bert Bakker, Amsterdam, 1996

( 受付: 2006年11月10日 )  
( 受理: 2007年2月2日 )